

# 奇数は鬼数か

——ミクロネシアの民話「片側人間」考——

河 合 利 光

## 1. はじめに

いかなる社会にも、聖数と呼ばれる数がある。私たちになじみの深い聖数の多くは奇数である。西洋諸国で知られているのは、ラッキー・セヴンのような幸運を呼ぶ7とか、一緒に写真をとると災いがあるとされる3人のような、奇数と幸・不幸を連想させる数であろう（四葉のクローバーのように、偶数が幸運と結びつくこともあるから、事情はもっと複雑であるが）。それが神・精霊・キリストの三位一体思想のようなキリスト教圏の宗教観と密接なつながりがあることは、推測に難くない。

日本でも奇数が文化の基層に存在してきたことは、数々の研究で言及されてきた。五七調の連歌や俳諧の韻律が奇数を典型としていることは、その典型であろう。社会心理学者の南博は、「日本民族は奇数を愛した（そして数はあらゆる生活の基礎だ!）」と述べた詩人の竹内勝太郎の言葉の意味を解説するとともに、古事記の国生み神話の時代から、「それは民族全体に共通的な感情生活の表現であろう」と述べている<sup>(1)</sup>。

ここで引用したのは、無数にある議論のうちの一部にすぎないのだが、歴史学や文学からの説を借用するまでもなく、私たちの身の回りでも、儀礼的・宗教的な聖数に満ち満ちている。名付け儀礼のお七夜、成長儀礼の七五三、結婚式の三々九度の杯、女性の厄年の19歳と33歳など、挙げればきりがなほ度である（もちろん、この場合にも死を連想させる病棟の4号室、還暦の60歳の儀礼など、偶数が儀礼的意味をもつこともあるから、奇数だけが聖数というわけではないが）。それはいずれも幸・不幸、災い、病気、健康、死と結びつく聖数であるといつてよい。

次に記すミクロネシアのチュークでも、奇数が聖数となっている。本論の目的は、鬼と妖怪人間（身体の半分が妖怪ないし鬼で、他の半分が人間であるような存在）、いわゆる片側人間の民話を手掛かりに、鬼・妖怪・神霊などの霊的存在と奇数との関連性を考察することにある。その問題に入る前に、まず、片側人間に関する主要な説と、ミクロネシアの具体的事例を紹介しておきたい。

## 2. 片側人間をめぐる諸説

片側人間に限らず、民話や神話そのものが現在の文化人類学では論じられることが少なくなった。その大きな理由の一つは、グローバル化によるポストモダニズム的状况の中で伝統文化が変化し、民話の語り部そのものが少なくなったことにあると考えられる。しかし、その原因が何であれ、筆者には、その研究が意義を失ったようには思えない。なぜなら、創作ではあっても、マスメディアでは多くの「語り部」たちがそれをテレビ、映画などの媒体を通して語っているし、幼稚園でも家庭でも子どもたちに漫画や絵本を通してそれを伝えている。多くは、見かけは多様化し、作品化・商業化されたが、鬼や妖怪、あるいはその類ともいえる怪獣など、奇怪な存在への関心が衰えているようには見えない。

本論はその現代的意義を論じることを目的とするものではないが、後述するミクロネシア（特にチューク）の民話は、過去と現在、自文化と他文化を問わず、なぜ人間が「普遍的」に鬼・妖怪・神霊その他の「異常」な霊的存在に関心をもち、他方でローカル色の強い特徴を保ち続けるのか、そして似たような民話が全く地域的・文化的に無関係と思われる社会になぜ見られるのかについて考えるための手掛かりを与えてくれるだろう。

本論の主題である片側人間については、1970年代から1980年代の構造主義人類学や象徴人類学が流行した時代に、象徴的二元論ないし象徴分類論の一例として注目されたことがある。ニーダムがその最も知られた研究者であるが、その著書『探索』<sup>(2)</sup>の要点を、吉田禎吾は次のようにまとめている。

この一例（多様な社会に類似の概念やカテゴリーがみられる）は、彼の著書『探索』で扱っている「半人」のイメージである。これは、片目、片頬、片腕、片胴、片足という人間のことで、こういう観念が、世界各地の神話、伝説、宗教などにみられるが、これは、多くの民族がこういう観念に本来ひきつけられる傾向（proclivity）があることを証明しているという。したがって、それが独立に発生したという説も、伝播による説明も実は同じことなのだと論じている。<sup>(3)</sup>

誤解のないように言っておくと、このような半分人間は、世界各地の少数民族だけでなく、ルーマニア、ギリシャ、ドイツなどヨーロッパ諸国にも見られた。ニーダムの同書に収録された章の「半分（half）人間」を長島信弘は「片側人間」と翻訳したが<sup>(4)</sup>、ここで片側が「半分人間」であることに注目しておきたい。ニーダムは半分人間が普遍的に分布する根拠を、精神病理学という大脳の損傷による疾患の身体知覚の神話化という解釈ではなく、ユング的な深層心理学的元型（アーケタイプ）に求めた。それは明らかにレヴィ＝ストロースの構造主義的無意識の理論を念頭においたものである。

ニーダムの影響を強く受けて日本の「片側人間」の民話を研究した小松和彦は、片側人間を心理学的深層心理に求めるニーダムの説には性急さがみられるとして、より文化表象論的、境界論的傾向の強い解釈を提示した<sup>(5)</sup>。小松は、特に異界の鬼・蛇・猿などの霊的存在がこの世の人間と結婚する異類婚姻譚型の民話の分析から、その結果生まれた子どもが、しばしば「片子」「片角子」(身体の半分が人間で半分が異類の「片側人間」と呼ばれることに注目した。そこから現世と異界の両界の境界領域の現象としてそれを分析した。

筆者の手元にある資料も限られているので、資料を系統的に整理し、通文化的に比較することからそれらの見解の是非を論じる用意はないが、以上の議論に筆者が何かを付け加えることができるとすれば、筆者自身がミクロネシア連邦のチューク州での調査の際にフィールドで入手した「片側人間」に関する資料を持っていることだろう<sup>(6)</sup>。

そのいくつかのストーリーを、特定社会文化の背景と脈絡に位置づけて考察できることは、一つの強みと考えられる。筆者の考察範囲がミクロネシアとその周辺地域に限定されるとはいえ、新たな角度から分析することで、従来とは多少とも異なる見解を提示できる可能性もありうるからである。

### 3. 頭だけの半分人間——ニプルモンの民話

先に触れた小松和彦は日本を中心に「片側人間」を論じたが、ミクロネシアの離島ポンナップ島を調査したこともあり、そこで採集した昔話に出てくるヤニュー・ヤラマ(片側人間)に言及している<sup>(7)</sup>。残念ながら同書には具体的なストーリーが紹介されていないが、ポンナップは筆者が滞在したことのあるチューク環礁と同じ言語・文化圏であるので、そこに伝わる妖怪人間(*énú-aramas*)とほぼ同じものと考えてさしつかえないだろう。ポンナップと同様、チューク環礁の妖怪人間は身体の半分がエヌー(ポンナップのヤニューに相当する)で他の半分がアラマス(人間の意味でポンナップのヤラマに相当する)である。

ところで、次に記すチューク環礁のニプルモン(*Nipéépéérúmóng*)と呼ばれる妖怪人間は、身体が途中で上下に切断され、非対称的に二分割されている事例である。これは、ニーダムが「もうひとつの方法は、上半身と下半身に分けることである。この唯一の例は、アステカ神話に出てくる始源の男女である。この二人は胸から下がなく、雀のようにとびはねていた」<sup>(8)</sup>と述べた事例に相当する。ニプルモンは頭だけの妖怪人間であるから、世界的に見ると、むしろ例外的な「片側人間」の事例といえるかもしれない。ニプルモンの「モン」は頭の意味である<sup>(9)</sup>。次に、筆者の採集したニプルモンの話を2つ続けて記す。

#### ニプルモンの民話①

昔、サナート島にニシャシャリサナートとニシャシャリナマという二人の女性がいた。二人は友達になる約束をした。その後、ニシャシャリナマはナマ島に帰ったが、別れるとき、ニシ

ヤシャリサナートがニシャシャリナマに「後から行くから待っていてね」と言って再会を約束した。そのときニシャシャリナマは妊娠しており、ナマ島に着いてから子どもを生んだが、その直後に死んでしまった。ニシャシャリサナートはそれを知らなかった。

数年後、ニシャシャリナマとの約束を思い出したニシャシャリサナートは、彼女に会いに行こうと思い立った。数人の男たちと船出しようとしたとき、ニプルモンという、手足も体もない頭だけの醜い男が近づいてきて、一緒に連れて行くよう頼んだ。彼は魔法の力で、ニシャシャリナマがすでに死んでおり、化物となって村人たちを食べ尽したことを知っていた。ニシャシャリサナートは、この醜い男を連れて行きたくなかったが、しぶしぶカヌーの片隅に置いた。

ニシャシャリサナートが次第にナマ島に近づくと、化物に変身したニシャシャリナマがそれに気づき、「ニシャシャリサナートは、私との約束を守らず、なぜ今頃、のこのこやってきたんだ。ようし、あいつを食べてしまおう」と考えた。

ナマ島に着くと、ニプルモンは、人々にカヌーを陸に上げるように言った。ニシャシャリナマが魔法を使って村人を作ったので、いないはずの村人たちが海辺で働いていた。ニプルモンは、カヌーにいる人々に向かって、「ニシャシャリナマはもう死んでいます。これから来るのは化物です。皆さんは一緒に行動しなくてははいけません。だれか私を担いで、化物の家まで連れて行ってください」と言った。

やがて化物が女装をして迎えにきた。家に着くと、ニシャシャリナマが「みんなで水浴びに行きましょう」と誘った。しかし、ニプルモンは、密かにニシャシャリサナートに、「二人だけで水浴びに行こうと誘われても行ってはいけません」と忠告した。それで、水浴びに出かけようとしたとき、ニシャシャリナマがニシャシャリサナートに、「別のところで二人きりで水浴びしましょう」と誘ったが、ニシャシャリサナートは「足だけ洗ってすぐ帰りますので結構です」と断った。

足だけ水で洗って人々がニプルモンのところへ戻ると、ニシャシャリナマは「ちょっと食べ物を取りに行きますから皆さんは私の帰りを待っていてください」と言い残して出かけた。彼女は死んだ自分の子どもの墓に行き、死体を取り出してその肉と骨を容器に入れ、それにコブラのジュースを上からかけて持ってきた。ニプルモンは、「持ってくる御馳走は子どもの死体だから食べずに捨てなさい」と、前もって教えておいた。それで皆、食べずにニシャシャリナマが立ち去ってからそれを捨てた。

ニプルモンは次に、一人の男に竹を取ってくるように頼み、さらに入口が2つある家を探した。夕方になると、ニシャシャリナマが鳥のように空を飛んで家の中に飛び込んできて、「ニシャシャリサナートはどこだ。おまえは私との約束を破り、なぜこんなにも遅くやってきたのだ」と言った。そのとき、人々は焚いてある火を、大きな団扇で煽いだ。ニシャシャリナマがもう一方の入り口から入ろうとしたが、やはり火を煽いだので入ることができなかった。

夜が明けはじめると、悔しがった化物（ニシャシャリナマ）は、彼らが船出できないように

舟底とマストと櫂を食べてしまい、そのカヌーの近くで寝てしまった。人々がカヌーのところに行ってみると舟が動かない。そこでニププルモンがその化物の腹に馬乗りになり、食べた船底とマストと櫂をその腹から取り出し、サナート島へ帰ろうとした。

ニププルモンは、その化物が追いかけてくることを知っていたので、「もしあの化物がやってきたら、私をあの化物目がけて投げてください」と船頭に頼んでおいた。化物が目覚ましてみると、誰もいないことを知り、彼らの後を追いかけた。化物が追いつくと、言われたとおり船頭はニププルモンを投げつけた。ニププルモンが化物と戦っている間に、カヌーは無事、サナート島に到着した。人々はその夜、ぐっすり寝た。翌朝、ニシャシャリサナートが海岸へ行ってみると、化物に勝ったニププルモンが波間に漂っていた。そこで彼女は、ニププルモンを拾い上げ、深く感謝して彼と結婚の約束をした。

## ニププルモンの民話②

ニププルモンはある日、一人の子どもと数人の男たちと一緒に、カヌーで船出をした。そのとき、一人の男が「うろろうしたら邪魔だ」と言ったので、ニププルモンは「そんなに嫌わず、カヌーの浮き木（フロート）の上でもいいから乗せてくれ」と頼んだ。

カヌーが進んで、鬼の住む島の近くまでやってきた。島の鬼の首領がそれを見て、「あのカヌーは帆を降ろしていない。俺たちが食うべき人間だ」と言った（カヌーが島に近づいたら尊敬を表すために帆を降ろすのが礼儀とされていた）。カヌーがさらに近づくと、「あのカヌーの男たちは座っている、俺たちの食うべき人間だ」と言った（カヌーが陸に近づいたら、立って見渡すのが礼儀とされていた）。その時、ニププルモンは黙って島を見ていた。

カヌーが岸に着くと、鬼たちが出迎えた。そして、「この上の方に行ってはいけません。下の方に水浴びする場所がありますから、水を浴びてきてください」と言った。人々は、ニププルモンの許可をえず、鬼に言われるまま水浴びに行った（上に行けばバナナその他の食べ物が豊富にあったのだが）。それは入ると疲れの出る水だったので、人々は帰るとぐったりし、夜になるとぐっすり寝込んでしまった。鬼たちは、その様子を見て、「食ってしまおう」と相談した。

ニププルモンは、蟻を人々の足に食いつかせて目覚めさせ、早くカヌーに戻って逃げるように告げた。カヌーが沖に出たとき、鬼たちがそれに気づき、追いかけてきた。そこでニププルモンは、自分を海に向かって投げるように人々に言った。鬼は空を飛んで追いかけてきたので、ニププルモンは水中から跳び上がり、空中で戦った。ニププルモンが空中に霧を張ってカヌーを見えなくしたので、とうとう鬼は退散した。ニププルモンが帰ってくると、人々は感謝し、歓迎して迎えた。

以上の2つの民話のニププルモンは、明らかに正常な人間の逆転したイメージである。まず、手足も胴体もない半分人間である。チュークの身体分類では、身体は頭と腹（首から下の全てを

含む)に分けられる。頭は男性的、腹は女性的な身体領域とされる。その意味で、ニプルモンが男性であるのは偶然ではない。

また、ニプルモンは、容姿が醜く、嫌われ者で、最初はどちらの民話でも排除の対象になっており、その意味でも「半端者・仲間はずれ」の特徴を備えている。けれども、ニプルモンは逆に、将来を見越し適確な判断を下して人々を導く、尋常でない力を備えている。その役割は、航海のリーダー（つまり航海長）の中心的役割に似ている。ニプルモンは姿形こそ正常ではないが、その言葉が知恵のある首長の別称でもあることから考えると、同じカヌーに乗船する人々に適切な助言と指揮のできるリーダーの言い換えであることは確かであろう。この昔話は、明らかに、知恵こそ首長と航海長の条件であるという教えでもある。ニプルモンは、集団の長である首長と航海長の中心性を「頭」で形象化した、リーダーの理想像ともいえるのである。

チュークでは、身体を頭側と腹側に二分割して、頭を思考・男性・政治の意味に、腹を女性側の意味に対応させる。それゆえニプルモンは、「腹」側の半分が無い妖怪人間の一種である。前者の民話で、ニプルモンが女性と結婚することで話が完結するのは象徴的である。「頭」は「腹」と合わさって1つの（完全な）身体になるからである。

#### 4. 片側人間と半分の形象

ニプルモンは地名と結びつく歴史・伝説（*wuruwo*）であり、子どもに語るための創られた民話（*tutunnap*）とは区別されるが、実際にはそれほど厳密に規定されるわけではない。ニプルモンも、民話として子どもに語られる（本論でも区別せず「民話」と記している）。

次の片側人間の話も、地名と結びつく歴史・伝説に分類されるが、民話としても知られるニプルモンと同じ妖怪人間の一種である。けれども、身体の両端（頭と足）を結ぶ中央の背骨のラインに沿って全体が左右対称的に分けられている、むしろ典型的な片側人間の事例である。

昔、ムニエンという村に、身体の半分が妖怪で半分が人間の男が住んでいた。その片側人間は、人間の女性を妻にし、一人の女兒をもうけた。その男は、家の中では人間の姿で人間と話すことができたが、一歩外に出ると妖怪の姿に変わり、ムニエン村の人々を次々に食べた。

ある晩、妖怪の父親が、いつものとおり家から出ていくと、子どもが不思議に思って「お母さん、お父さんはいつもどこに行くの」と母親に尋ねた。そこで、母親は正直に、「おまえのお父さんは人間ではありません。妖怪です。だから外に出ると、どこへ行くのかわかりません。最近、この村の人たちが毎日死んでいるから、きっとお父さんが食べたのでしょう。村人がみんな死んだら、今度はおまえや私を食べるかもしれませんよ」と言った。それで子どもは怖くて眠られなかった。明け方、子どもが、帰って来る父親の姿を家の内側から見ると、いつもの父とは似ても似つかない姿をしていた。

夜が明けると、子どもは母親に村を巡ってくると断って、村の家々を訪れた。どの家にも人

影がなかったので他の村に行くと、まだ数人の姿があった。彼らはその妖怪の子どもをすぐに殺そうとしたが、一人の老人が、「殺すな。父親は妖怪でも、この子は人間だ。もし妖怪を殺したいなら、子どもを捕えて人質にした方がよい」と言ったので、他の人たちも同意した。

子どもを人質にとられたと知った妖怪は、夕方になって妻に、「家で待っていなさい。今から行って子どもを取り返して来る」と言った。その言いつけに従わず、妻も夫の後を追って行くとしたが、夫の姿の物凄さに恐れをなして家に戻った。

妖怪が子どもの人質になっている村の集会所に行くと、そこには山積された薪に大きな火が焚かれていて、入れなかった。妖怪がたじろいでいると、村人たちは銚を妖怪に目がけて投げつけた。それで負傷した妖怪は、大きな鰻の姿に変身して帰宅し、妻を呼んで言った。「俺はもう人間の姿には戻れない。家の中に入ったら死んでしまうから、このままの姿なら生きていけるので水の中に入る。だから、毎日、食べ物を運んでほしい」と頼んだ。妖怪が死んだと思った村人たちは、人質の子どもを母親に返した。

それから年月が過ぎて、この村にも人が増えてゆき、鰻の住む川の近くにも家が建った。子どもたちは、その川で毎日、遊んでいた。ある日、子どもたちが川に1匹の大きな鰻を見つけて泣き叫んだ。一人の男が急いで駆けつけ、その鰻をナイフで刺したが、血が出ずにパンの実の汁が出てきた。やがて鰻は見えなくなり、その汁だけが川面に漂っていた。

夜が更けて、人々は深い眠りについていた。人々が物音で目を覚ますと、家中のあちこちに鰻が這い出していた。それを見て、驚きのあまり死んだ人もいた。人々の泣き声を聞いて妖怪の妻が駆けつけて見ると、鰻がウヨウヨ這っていた。急いで川岸に行き、夫に言った。「どうしてこんなことをしたのですか。人間を食べてはいけません」。すると鰻は、呪薬を渡し、それを各家につけるよう言って姿を消した。その呪薬で、鰻はすっかりいなくなった。

その後、妖怪の妻は亡くなったが、その呪薬の製法を子どもに教えておいたので、子孫代々伝えられ、二度と家に鰻が這い出してくることはなかった。

ここで「妖怪」と翻訳したエヌーアラマスは、先に「鬼」とか「化物」と記したのと同じエヌー（霊）の一種である。チュークの主島であるウェノ島（旧モエン島）の観光客用の民芸品売り場で、筆者は身体が右半分だけの木製の片側人間像を見たことがあるが、それが片側人間をイメージしたものであることは明らかである。エヌーは、カミ、精霊など、多様な霊的存在を包括する概念である。先述のように、ニプルモンは、形象的には、身体を中心から左右に分割するとは異なり、上下非対称的で頭だけの妖怪であるから片側のイメージからは逸れるが、このエヌーも現地カテゴリーでは身体が半分のエヌーアラマスの一種と考えられている。

チュークには、パンの実、タロ芋、魚など、モノを半分切るのに、大きく分けて2つの方法がある。一つは（直立する身体の）全体を背骨のラインで切ってそのラインから左右の両側に切り分ける方法である。例えば、魚であれば、背骨に沿って上から右と左に身を切り分ける。これはエペック（*epék*）と呼ばれ、その一例は前節で紹介した民芸品の片側人間である。もう一つ

は、頭と足（尾）を結ぶ背骨のラインの「中間」で、頭側と足（尾）側に半分・半分に切り分ける方法である。これをエソップ (*esópw*) と呼ぶ。エソップも半分の意味であるが、村（ソープ *sóopw*）と語源が同じである。村も東側（頭側とされる）と西側（足側とされる）の東西に分けられるが、それは本来、半分と半分が合わさって構成されるものであることを示している。この場合、1つの村（ソープ）は東西の2つの地域単位に分けられるが、その分割された片方の地域単位も同様にソープ（半分）と呼ばれる。

先に記したエヌーアラムスを、あの世とこの世の中間的・両義的存在であるとか、構造主義的な普遍的無意識の文化的表象と解釈することも可能であろう。しかし、少なくともニブプルモンは、二元論的思考の表象ではあっても、形象的には頭だけで胴体と手足がなく、身体を対称的に二分した欠損状態を表している。それは、形象の見た目の対称性よりは、頭「半分」だけで、全体（完全性）が毀損されているという意味での認識的・心理的・文化的概念が関与していることを示している。つまり、チュークの半分（片側）の表象は、単に A と B の分類から逸脱した中間領域（両義的境界）の宗教性とか、人類普遍の二元的分割ないし二元論的分類思考の文化的表象といった象徴論的・記号論的問題であるという以上に、次節で論じるように、全体（完全性・統合性）の毀損によりバランスが崩れる心身の感覚と、日常経験の認識に関わるテーマである。形象と心身の対応性は、先に検討した空間と事象の両側分割（エベックとエソップという半分の認識）が身体の両側分割に対応していることにも示されている。

要するに、片側人間の民話は、特定の人々に共有される文化的表象ないし知識体系ではあるが、日常経験や心身の感覚・情動から納得される、住民により社会文化的に共有された秩序の認識体系でもある<sup>(10)</sup>。次に、その点を、もう少し具体的に説明してみよう。

## 5. 半分と中心の奇数性

### (1) 中心と両側

数字は確かに、文化人類学者のクランプが言うように、論理に基づく象徴体系であると同時に世界の秩序を表す方法、つまり生活の混沌（カオス）をコスモス（調和的世界）へと変換する秩序化の思考様式である<sup>(11)</sup>。そのように、数字が世界を秩序化する論理的思考体系であることは確かであるが、それをさらに、特定文化のコスモス（調和的秩序）と日常経験の認識の表象と言い換えることも可能であろう。先に触れたように、チュークの民話では、エソップとエベックの認識の意味が、心身の認識、日常経験、及び数字による認識の秩序化に結びついていると考えられるからである。

まず、チュークの昔話の語りでは、最初に語り手が「セセピノ、セセピット」(*sesepinó, se-seppito*) と唱える。セピットとは、霊を呼び出し憑依するよう唱えるときに、霊媒師が使う言葉である<sup>(12)</sup>。筆者のインフォーマントによると、それは祖先から得た言葉という「葉」が語り手の頭から口を通して引き出され、語り手の口から出て布のように空中に広がり、語り終わると口



から頭の中に収まることである<sup>(13)</sup>。

また、日本語で物語の最後に「めでたしめでたし」と言うところを、「半分終わって紐を引っ張る」(*mwúúch mee sópw, tere me iyeyey*)とか、「切って、切って、切って、すべすべしている」(*pékú pékú pékú chenechen*)と言う。ここで、「半分終わって」というのは、日本語の「話半分」と言うのと同じで、昔話が半分しか完結していない、つまり昔話という布の残りの半分の、次回に引っ張って続ける意味である。後者の表現の「切って」という表現も、やはり話が完全に終わっておらず、次に続く意味を表す。切る意味の「パク」は斜めに切る (*pékúya* 上記のエソップと同じ要領で少々斜めに切断する意) ことで、その切り口は光っている。こうして(半分に)切って「光って」いる切り口からは芽がよく生える、つまり生命力が次に続くと考えられている。話が完全に終わった場合には「おしまい」(*awes*)になる。しかし、昔話は、次の話への連続性を前提としていて、常に「話半分」なのである。

ここで先の民話に戻れば、ニブプルモンも妖怪人間も半分しかない毀損状態にある完全でない存在だから、異常なイメージを喚起すると考えられる。ニブプルモンの「半分」の身体も、妖怪人間の家の内側に在るときの正常な身体も、完全性が欠如している。ただし妖怪人間の子どもは「片子」とはされていないし、半分人間の妻も正常の人間とされている。これは、チュークの社会が母子関係を重視する母系社会であることに対応していると考えられる。ともあれ、昔話が常に「話半分」なのは、次の話の「半分」との連続性と両側の接合を前提としていることに注目したい。1つの話は次の話を合わせたうちの半分(エソップ)であり、その合わせて1つになった全体は、さらに次に続く話の「半分」である。理論上、「これでおしまい」はありえない。

仮に夫婦が身体を重ねて「半分と半分」を合わせたイメージが「完全性・完結性」を表すとしたら、その数は1であり、奇数である。同様に、4という偶数も、半分・半分に分けた場合には、2を1束(奇数)とし他方の2を1束(奇数)として、その両方を合計した数と考えることができる。これは、筆者の勝手な推論ではない。チュークでは、それは日常的に経験しうる当たり前の論理である。次にその具体的例を示してみよう。極めて複雑なので、一部を示すに留める。

例えば、魚とパンの実と包みの数え方はそれぞれ異なる。

まず、魚は1棹(*efóch*)で数えるが、1棹は魚5匹(*echóóch*)と5匹とを合わせた単位である。これは、一人の人間が肩に担いだ棹の前方に5匹1束の魚を、後方に5匹1束の魚を吊し、その棹の中心を肩に担いで、バランスをとりながら運ぶ様子を想像すればよい。この場合、棹の前方に束ねた5匹(奇数)の魚の数と棹の後方に束ねた5匹(奇数)の魚を合わせて「1棹」(10匹)になる。全体として、一方の奇数の束と他方の奇数の束が、中心(担ぎ手の力点である肩)で支えられる。さらに、その1棹をもう1本の1棹に合わせると2棹になる。要するに、両側が合わさって全体のバランスがとれ、全体として中心により統合される。この場合、1本の棹の中心と両端が全体のバランスをとる力の焦点であることに注目したい。中心と両端、さらに広げて中心と四方の隅は、全体としてバランスを維持するが、いずれも全体を支えるパワーの中心点で

ある。その中心と両端には、一方が他方を支える「半分」という意味で、1（片側）の数に還元しう奇数的意味がある。

同じ原則は、パンの実の数え方についてもいえる。パンの実も「1棹」単位で数えるが、1棹とは、1本の棹の担ぎ手の肩の前側の端に15個（7+8の合計）を1つにまとめた束を、そして肩の後ろ側の棹の端に15個（7+8の合計）を1つにまとめた束を取り付けた単位である。その棹の中心を肩で担いで運ぶ。こうして両側とその中心点を支え、全体のバランスをとりながら中心の担ぎ手は運ぶことができる。

また、パンの実を焼いたり蒸したりして料理した後、それをタロイモの葉に包んだ場合には、計算方法が少々異なる。ただし、半分と半分为1つに合わせるという原則は同じである。この場合、1束（*echóóch*）は、1包み（*etúkúkúm*）が2つ合わさった数である。逆に言うと、餅状にしたパンの実を葉で包んで1包みにし、その包みを2つ合わせると1束になる。その1束を他の1束と合わせて、より大きな束にすると「4つの包み」（*fojúkúm*）と呼ばれる。こうして、人は1束、あるいは4つの包みのパン餅を両手で持って運ぶ。要するに、1包みは他の1包みと合わせて1束となるから、1束を右手に、もう1束を左手に持つと、両方合わせて4つの包みを持つことになる。その4個は右と左の半分・半分に分かれる。

いずれにせよ、その論理は、全体が両側に分かれ、その両側の中心点（肩で担ぐ支点）を支えたり持って運んだりするときの身体感覚に結びついている。宗教的力の認識の源泉をそこに見ることは、必ずしも突飛な見解とは言えないだろう。その際、肩や手で支える力の中心点は、棹の両側をペア（偶数）とし、その両側を中心で統合する支点（奇数＝第3の数字）に相当する。また、半分と半分のうち、一方が毀損した状態は、全体のバランスの崩れた状態（異常な事態）であり、奇数的意味に相当する。言い換えれば、奇数は全体を統合する力であると同時に、全体の欠損と破壊（箱が崩れた醜い状態）の状態を意味するから、力の異常性を喚起する。

本論で強調したいのは、片側人間という民話のモチーフを、単なる記号論的に分析しうる知的テキストとして見るのではなく、その民話を担う人々の日常経験性、身体の均衡や感覚、呼吸や血流のような生理機能、空間認識のような、心身の次元に関する身体化された住民の認識に意味があることである。

例えばチューク語のウメス（*umwes*）という言葉には困惑、忘我、狂気のような精神的混乱の意味があるが、筆者のインフォーマントによると、それは自身の持っている食物の半分为誰かに奪われたような心理的状态のことである<sup>(14)</sup>。逆に、自身の食物を他者に与える行為（*chu*）は、対面して心と身体（の半分・半分）を合わせる友好的な意味をもつ。その両側の人と人の心の分離と結合の心理的意味は、両方の半分（片側）が合わさって安定した1個の箱の形となる、一体性・完全性・調和の意味に合致する。逆に、その秩序の破損ないし欠如は、心理的混乱や宗教的意味をもつ。いわば、奇数（全体の毀損の状態）は「鬼」（宗教的・心理的・身体感覚的意味を含めて）に通じる意味を生成するといえる<sup>(15)</sup>。

## (2) 奇数の両義性

先に筆者は、「片側人間」をめぐる民話・伝説の類の分析から、チュークにおけるその認識的意味を考察してきた。その「半分」の心理的・霊的イメージが、さらに抽象的な物理的・心理的・身体的なバランス感覚や空間の統合認識から説明できると筆者は考えた。この論理でいくと、「片側」ないし「半分」のイメージは、調和的秩序を創造する力と、災いや不幸を招く破壊的力のいずれにも関わることになる。

まず、ニプルモンは、最初は嫌われ排除される半端で仲間はずれの存在（奇数的存在）であったが、やがて、カヌーの乗組員を指揮する航海長のような中心的存在（中心も最初の数1で、奇数的意味をもつ）として尊敬されることになる。つまり、ニプルモンは身体が半分であるゆえに異常な力を持ち、さらには、社会の中心に座して四方のメンバーをコントロールする航海長ないし政治的リーダーとなる。それは、首長や航海長の中心的存在のイメージにも転化しうる。

もともと社会内では、政治的リーダーである首長も航海長も、奇数的意味をもつ中心的存在である。航海術に詳しい伝承者の説明によると、カヌーは中心に立てた帆柱の上の先端から甲板の四隅にロープを結んで固定し、そこに帆を張ることで安定する。また、航海長と乗組員の関係は、その中心の帆柱と四隅の関係に対応する。つまり、中心のリーダー（航海長）は、両側ないし四隅（偶数）の数には組み込まれない外れた数字（1番目ないし5番目）、つまり奇数に相当する。言い換えれば、中心は他の2つないし4つの数を統合し、逆にその両側ないし周辺の隅が、中心を支える物理的力をもつ。その比喻でもって解釈するなら、ニプルモンは、四方八方を統合してバランスを維持する帆柱としての航海長と同様の中心的存在である。

実際、航海長は、チュークの言葉でペヌ（*pénú*）と呼ばれるが、それはエヌー（*énú*）、つまり霊的存在に由来する言葉で、奇数を意味するペヌ（*ppénú*）と同一視されることもある。特に「悪い航海長」は仲間はずれの意味をもつ。言い換えれば、ニプルモンは頭しかない片側人間であるゆえに半端者・仲間はずれであったが、最終的には同じカヌーに乗船するメンバーを中心（両側と四隅の中心）から支えて統合する、首長ないし航海長と同じ力もつ存在として描かれている。

それでは、身体の右半分が妖怪で左半分が人間であるような先の民話の妖怪人間について、どのように考えるべきであろうか。この妖怪人間は、ニプルモンと同様、人間界から排除される存在ではあるが、ニプルモンと違い、人間を「食べる」という破壊的行為を行い、その結果、排除され、手足がない鰻に変身したままになった（鰻は恐ろしい生き物と考えられ、食べるのをタブーとされている）。いわば、完全な人間にはなれず、鰻のように手足も鱗もない、身体的に「半端」で不完全な奇数的存在のまま残る。

ただし、この話は特定氏族の伝承として語られていることに注意する必要がある。ミクロネシアの民話では、鰻はしばしばファリック・シンボルとして現れるだけでなく、チューク環礁のソウエフェン氏族の起源伝承のように女祖の産んだ子どもとされている<sup>(16)</sup>。だとすると、妖怪人間の化身である鰻は、始祖という氏族の中心的存在のイメージと結びついていることにな

る。実際、既述の民話の神話でも、鰻は妻である女祖とその子孫に呪薬を伝えている始祖的存在でもあった。

ミッチェルの著書『ミクロネシアの神話』<sup>(17)</sup>の中には、ポーンベイ（ポナベ）に伝わる「鰻の回生薬」という話がある。ここでも鰻を食べないのが一般的であるが、それは鰻が主要諸氏族の女祖だからだという。それによると、人間に捕えられ、焼かれて木に吊るされていた子どもの鰻が母鰻を呼んだ。身体の半分は料理されていたものの、頭側の半分は半焼きで、まだ生きていたからである。母鰻が駆けつけて木に登り、吊るされたその子どもも鰻の身体を半分・半分に切って、その生の部分の半分に呪薬をつけると全身が蘇生して生き返った。

ミッチェルは、同書の同じ個所で、同様の民話がトラック（チューク）にもあると聞いたと記している。チュークの鰻は、妖怪人間にも似て排除されるべき存在と見なされているが、氏族の祖先の中心の力にも置き換えられうる両義的存在であることを、それは示している。

## 6. おわりに

地域福祉の立場から、大野智也・芝正夫の両氏は、心身に障害のある人が「福子」「宝子」「フクムシ」などと呼ばれ、幸福を招く形象として尊重された日本の民俗伝承の資料を、全国から収集した<sup>(18)</sup>。そのような民間で伝承されてきた事例だけでなく、片足、片腕、極小などの身体的毀損（障害）をもつ人物が異常なパワーを備えるモチーフの作品を、映画、漫画、テレビドラマ等でしばしば見かける。

このような日本の事例はミクロネシアと共通性がある。しかし、先に示したミクロネシアのローカルな「奇数の鬼数性（聖性）」の論理でもって日本の事例を全て説明できるかどうかは、今後の検討を要する。しかも、本論の事例から得た結論が、どれほど普遍性をもつかについても不確かである。事実、筆者の別の調査地である南太平洋のフィジーの先住民文化では、奇数ではなく偶数がむしろ聖数であり、鬼が「片側人間」であるという考え方も筆者の知りうる限り存在しない。

ただし、ミクロネシアについて筆者が論じた見方で理解しうる社会が相当多く存在することも確かである。例えば、インドネシアを研究したウォーターソンは<sup>(19)</sup>、奇数を聖数とするアチェ人、ブギス人、バリ人も、神秘的な影響力は四隅を通して入ると見なしており、その隅は奇数に対応すると報告した。屋敷の四隅は家の内と外を結ぶ病気や霊的力の流れる境界（穴）であり、それは奇数の生命力と偶数の死の意味に関連する。さらに、中心・臍・植物の根は生命力の源泉（中心）となる隠喩的源であるとも指摘している。それは、中心もまた、隅と同様の霊力（生命力）に関連があることを示している。中心と四隅が霊的意味をもつこと自体は東南アジア研究者によりしばしば報告されてきたが、四隅が奇数に結びつくというウォーターソンの指摘は注目に値する。東南アジアと同じオーストロネシア語圏にあるチュークの、先に説明した四隅と中心の奇数性に共通性が認められるからである。内と外、横のラインと縦のラインの交わる接点（隅）

も両側の中心ないし四隅を結ぶラインの交点（中心）も、生命力（力）の中心となる。それは、「半端・仲間はずれ」という奇数的意味がその中心と接点に付与されるチュークの認識モデルによく適合する。

今までの筆者の議論は、冒頭で紹介した、「片側人間」をユング的な心理的元型の表象と考えるニーダムの説に似ているように見えるかもしれない。けれども、筆者は、それでもって直ちに、文化表象の心理還元主義と本質主義的普遍性を提唱しているわけではない。なぜならそれを「元型」という心理的普遍性にそのまま還元するのは、小松和彦が批判するように「それに至るまでの分析の手續に性急さがみられる」<sup>(20)</sup>からである。仮にそれが人類普遍の元型であるとすれば、その表象が地域・文化により多様である（もしくは見られない）理由を説明できない。

他方、ニーダムが指摘したように、片側人間と類似の話が地球上の多様な諸社会に分布していることも、また確かである。さらに、グローバル化により他文化と混在しても、なおかつ形を変えて再生産されているように見える。従って、人間として普遍的な生物学的・心身の基盤もまた、存在すると考えなければならない。

そのような、一見したところ矛盾するかに見える見解の存在こそ重要である。なぜなら、妖怪ないし鬼（神霊・物理的力・生命力を含めて）を奇数の論理で秩序化する現象が世界に広く見られることは、それが生物学的・経験的に規定される心身の普遍性に根差しているからだといえるが、他方で片側人間が全ての社会に存在するわけではなく特定の人間集団により創造され共有されているローカルな文化であることは、心理的「元型」そのものに、多様で可変的な文化的認識作用が介在している結果と見ることもできるからである。

#### 注

- (1) 南博 1994『日本人論－明治から今日まで』岩波書店, p.118, cf. 竹内勝太郎 1934「日本の詩と音数律の問題」『芸術民俗学研究』立命館出版部増補版, 福村書店, 1949所収。
- (2) Needham, Rodney, 1980. *Reconnaisances*. Toronto: The University of Toronto Press.
- (3) 吉田禎吾 1982「象徴分類と比較研究－ロドニー・ニーダムの所論をめぐって」『現代思想』6. (特集＝人類学の最前線) 青土社, pp.54-61.
- (4) ニーダム, ロドニー 1982「片側人間」(長島信弘訳)『現代思想』vol.18-8. pp.42-53. なお、本論では、「半分人間」と「片側人間」を状況に応じて使い分けるが、どちらも原典の half の翻訳語であり、同じ意味で使用している。
- (5) 小松和彦 1982『異界を覗く』洋泉社
- (6) 筆者は、ミクロネシア連邦のチューク州(旧トラック)で、1977年から8回にわたり調査を実施したことがある。主な調査地はチューク環礁のウドット島である。副次的ではあるが、その際、多く神話・民話・伝説も収集した。その資料の一部は、以下の論文に一部収録した。(河合利光 1979「民話と罵倒表現にみる食物の象徴性－ミクロネシア・トラックの場合」『社会人類学年報』Vol.5 弘文堂, 2001『身体と形象－ミクロネシア伝承世界の民族誌的研究』風響社)。
- (7) 小松和彦 1998 前掲書, pp.78, 99.
- (8) ニーダム, ロドニー (長島信弘訳) 1982 前掲書, p.46.
- (9) ニブプルモンには、禿げ頭の意味もある (Goodenough and Sugita 1980 *Trukese- English Dictionary*. Philadelphia: American Philosophical Society.)

- (10) 河合利光 2001 前掲書。この問題は、同書で詳細に論じたことがある。
- (11) クランプ, トーマス 1990 『数の人類学』(高島直照訳) 法政大学出版会, p.47.
- (12) Goodenough and Sugita, 1980, 前掲書
- (13) 河合利光 1993 「ミクロネシアの首長権の象徴」石川榮吉監修『オセアニア②伝統を生きる』東京大学出版会, pp.204-205.
- (14) 精神的混乱を意味する言葉のウメス *wumwes* が食物を半分奪われる心理状態に結びつくのは、それが食物を置いて料理する場である石の竈(ウム *wumw* または *wuumw*)に関連があると筆者は推測している。
- (15) 本論では詳述を避けるが、偶数の2, 4, 8, 10は、完成・調和・秩序を表す数(その意味で偶数も聖数)であると、とりあえず想定しておきたい。チュークでは、四隅と8つの角(隅)をもつ「箱」の形象は、完成、完全、均衡、調和を意味する。逆に、「箱が崩れた」という表現は、死と秩序の破壊の意味である。
- (16) 河合利光 2001 前掲書, p.16.
- (17) ミッチェル, ロジャー E. 1979 『ミクロネシアの民話』(古橋政次訳) アジアの民話6 大日本絵画 p.109.
- (18) 大野智也・芝正夫 1983 『福祉の伝承-民俗学と地域福祉の視点から』堺屋書店(発売:こずえ)
- (19) Waterson, Roxana, 1990 *The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia*. Oxford: Oxford University Press. pp.129, 191.
- (20) 小松和彦 1982 前掲書, p.78.

---

[かわい としみつ 文化人類学]